『人間喜劇』と聖職者たち

泉　利明
千葉大学国際教養学部

The Clergymen in “ *The Human Comedy* ”

Toshiaki Izumi

要旨

本論は、『人間喜劇』に登場する多くの聖職者について、バルザックの宗教思想および社会観と、小説内で聖職者が果たす役割の観点から、考察したものである。十九世紀前半のフランス社会において、フランス革命とそれに続く一連の出来事で、キリスト教をめぐる状況が大きく揺れ動いた。そこで結果として生じたのは、聖職者の多様性である。バルザックは、自己の宗教思想を主張するのではなく、多様な聖職者像を作品ごとに描き分ける。本論では、教会内の上下関係、聖職者と信者の結びつき、カトリック教会が提示する道徳の意味、信者の信仰のあり方などの問題を取り上げ、複数の小説における共通点を検討し、聖職者像や聖職者と信者の関係の多様性が、物語の多様性を生みだしていることを示した。

キーワード
バルザック、『人間喜劇』の聖職者、小説と宗教、カトリック、無神論

職業と小説

いくつもの要素が、小説の登場人物を特徴づけている。家族、住居、性格、対人関係などが具体的になることによって、それぞれの人物の個性が形づくられる。職業もまた、登場人物の造型と深くかかわる要素のひとつである。貴族という身分にあることも含めて、人は生きてゆくために何らかの方法で金銭を得なければならない。そして登場人物がどんな職業につくかが、物語の内容や構成に大きく影響する。作者が選んだ職業が、その人物の行動をある枠の中にはめこむのである。シャルル・ボヴァリーが医者で、ジェルヴェーズが洗濯女であることは、『ボヴァリー夫人』と『居酒屋』の物語を決定づけている。同じことはバルザックの多くの小説にも当てはまる。

『人間喜劇』に含まれる作品あるいはその登場人物が変化に富んでいるのは、人物たちがたずさわる仕事が多様だからでもある。バルザックはあらゆる事柄を作品の中で描きつくすという野望を抱きながら小説を書いていったが、職業はその重要な主題の一つであった。ハンスカ夫人への手紙では、このように宣言されている。

> 『風俗研究』は、社会的な結果を一つ残らず表現して見せるでしょう。人生のある状況や、男と女の容貌や性格も、生活様式も、職業も、社会のある領域も、フランスの地方も、子供、老人、成熟期の諸々のことも、政治、法律、戦争についても、それが何であれ、一つとして忘れることなく[(1)]。

では、職業という主題は、バルザックの作品においてどのように提示されているのだろうか。まず、職業あるいは職業人について分析し、考察するというケースがある。『娼婦の栄光と悲惨』では、「あらゆる職業には、その仕事特有の良心がある」(VI, 496)[(2)]と述べられているが、十九世紀前半のフランス社会で、それぞれの職業はどのような姿を呈し、人は何をしているのか、その点に対する興味がバルザックには強くある。『役人の生理学』や『パリのジャーナリズム研究』といった文章は、こうした関心から書かれている。これは、1830年から40年代に広く見られたことでもあった。さまざまな風俗習慣を扱った『生理学』ものが流行し、バルザックも執筆者の一人であった『フランス人によって描かれたフランス人』*Les Français peints par eux-mêmes*にも、職業に関する項目が数多く含まれている。

職業についての考察が、説明的な文章ではなく小説の中でも述べられているのはいうまでもない。『役人の生理学』は小説『役人』と、『パリのジャーナリズム研究』は『幻滅』と深いつながりがある。『実業家』は、「ロレット」と呼ばれる娼婦についての言及から始まる。ただ、こうした文章が、それぞれの職業人の典型的な特徴を抽出しているのに対し、小説の登場人物であれば、人物としての個性を備えていなくてはならない。同じ職業についているからといって、すべて同じように振るまうわけではない。『名うてのゴーディサー

ル』は、この名を持つ出張セールスマンを主人公とするが、彼を登場させる前に作者は、「（出張セールスマンなるものの）『属』Genreは、これでお分かりになっただろう。次に述べるのは、その『個体』Individuである」（IV，564）と書く。職業人が含みもつ二重性が、「属」と「個体」という生物学的用語で示されている。登場人物としての職業人は、この二重性の中でみずからの独自性を確立するのである。

小説では、物語の展開からどうしても出さねばならない職業がある。誰かが病気になれば医者が呼ばれる。死が迫れば聖職者が登場する。相続や夫婦財産契約の問題が生じれば公証人が出てくる。このような場合に求められるのは、人物の個性ではなく、職業と結びついた役割そのものである。こうしたときに『人間喜劇』では、再登場人物が対応し、それによって余分な説明を省くことが多い。ただ、彼らもまた物語の中で重要な役割を担うときには、職業人の「属」の部分だけではすまず、その「個体」としての独自性を際だたせてゆかねばならない。

本論では、職業の中で特に聖職者に焦点を当て、『人間喜劇』に含まれる作品を中心に、教会にかかわる人物たちの特徴を検討する。スタンダール、ゾラ、バルベー・ドールヴィイなど、十九世紀フランスの小説家たちは、聖職者がしかるべき役割を果たしている作品を書いているが[(3)]、バルザックもその一人である。聖職者の描き方の違いは、個々の作家のキリスト教の捉え方を、少なくとも部分的には反映しているだろう。ただ『人間喜劇』が特徴的なのは、作品の分量に見合う形で、聖職者もまた数多く存在するということである。

バルザックは『人間喜劇』「総序」で、「君主制と宗教」（I，20）という二つの柱を軸に小説を書くと宣言する。宗教が彼にとって最も重要な主題の一つであったことは明らかである。しかし、『人間喜劇』中の大勢の聖職者を前にしたとき、その分析は、作者の宗教論や社会思想だけでなく、小説の物語におけるその役割にも向けられるべきだろう。理念としての宗教と現実存在としての聖職者のあいだには、少なからぬ隔たりがある。バルザックは聖職者が含みもつ属性を、何人もの聖職者を通して分散させており、それぞれの聖職者は固有の特徴を備えている。『人間喜劇』における聖職者の検討は、狭い意味での思想に収斂させることを目指すのではなく、まずその多様性を浮かびあがらせることから始めるべきだろう。

極端な例として挙げなければならないのは、「神父」カルロス・エレーラである。エレーラことジャック・コランは、罪を犯して刑務所に入り、脱獄する。その後、ヴォートランとして『ゴリオ爺さん』に登場し、ラスティニャックたちとヴォケー館で暮らすが、逮捕され、また監獄に送られる。しかし、再度脱獄し、カルロス・エレーラという名のスペイン人聖職者を殺害し、化学薬品を使って顔を変え、エレーラになりすます。このエレーラが『幻滅』第三部で、自殺しようとしていたリュシアン・リュバンプレと偶然出会い、二人のその後が、『娼婦の栄光と悲惨』で語られる。カルロス・エレーラは、偽の神父でありながら、というよりもむしろ偽の神父であるがゆえに、小説の登場人物として聖職者が

もつ特徴を強調し、周囲の人々にその偽のアイデンティティを信じさせなければならない。そして『娼婦の栄光と悲惨』の物語があのような展開を見せるためには、コラン＝ヴォートランが聖職者エレーラに化けることは必要不可欠だったのである。

『人間喜劇』は、聖職者なしでは成りたたない社会を描いている。では、エレーラも含めて、『人間喜劇』の聖職者たちは、物語に何を持ちこみ、小説の構成とどう関係しているのだろうか。この点を論じることは、バルザックにおける理論的な思想の表現と虚構としての作品の創造のあいだの揺れを辿る作業ともなるだろう。

教会と社会

『人間喜劇』に多様な聖職者が登場する理由の一つは、十九世紀前半にキリスト教が置かれていた状況と関係がある。以前は、教会が果たす役割ははっきりと定められ、聖職者がなすべきことは明確であった。「神の人」となるために教会に入るのは、みずからの個性を消し去ることにつながった。建築物としての教会がそうであるように、変化せず持続することが、キリスト教の本来の姿だったはずである。しかし、フランス革命とそれに続く一連の出来事が、社会と教会を大きく揺さぶる。

キリスト教の否定でもあったフランス革命の流れに抵抗しようとした聖職者は少なくない。『ふくろう党』は、革命の理念をフランス全土に行き渡らせようとする共和派と、それに対立する反革命軍の争いを描く。この小説で反革命側の聖職者となっているのが、ギュダンである。彼は、王党派の指導者モントランとともに、「教会と国王」を不可分のものとして死守しようとする。

ギュダンは、革命と敵対すると同時に、ブルターニュという地域性を色濃く体現する聖職者である。ブルトン人たちは、死後の復活を素朴に信じており、ギュダンはそうした感情をうまく利用しながら住民をまとめている。彼が執り行うミサは、カトリック的というよりも、原始キリスト教的な雰囲気に包まれている。

『恐怖時代の一挿話』もまた、革命によって生じた特殊な歴史的状況の中での聖職者の感情と行動を題材としている。ルイ十六世をギロチンで処刑した死刑執行人サンソンが、国王の鎮魂のために、司祭であることを隠し、身を潜めて暮らしている男にミサをあげるよう求める。ここでもキリスト教と王政は結びつけられ、反革命側に立った視点から、恐怖政治の一面が描かれている。

フランス革命とキリスト教の関係で重要なのが、1790年に成立した聖職者民事基本法である。聖職者を国家の管理下に置くこの法律を認めるかどうかで、大きな対立が生じた。それに反対し、宣誓を拒否することが、より純粋な信仰心を持っている証となる。『恐怖時代の一挿話』の司祭は、その一人である。『村の司祭』でヴェロニックの父親は、宣誓を拒んだ司祭のミサに出て、二度も死刑判決を受ける。『トゥールの司祭』の中心人物ビロトーも、宣誓を拒否したことが、『セザール・ビロトー』の中で語られる。「司祭に任命

されたフランソワ・ビロトーは、革命の間は身を隠し、野獣のように追いつめられ、捕まれば少なくともギロチンで処刑されるという、宣誓拒否司祭としての放浪生活を送った」（VI，54）。

1815年の王政復古により、聖職者の位置づけはまた変わる。しかし、教会がかつてのような権威を取りもどすことはもはやない。バルザックは、制度としての教会が大きく弱体化したことを繰りかえし強調している。『娼婦の栄光と悲惨』では、「社会秩序全体を支える二つの柱である宗教と司法は、すべての事柄において進歩したと自負するこの十九世紀に、力を弱めてしまった」（VI，802）と指摘し、『老嬢』では、十九世紀とは、「もはや宗教が、ある人々にとっては手段にすぎず、別の人々にとっては詩にすぎないと考えられているような時代」（IV，862-３）だという。その結果として『人間喜劇』には、依然としてキリスト教を深く信じる人々と、そうした信仰心を失ってしまった人々が混在している。聖職者たちは、こうした状況に対応することを余儀なくされているのである。

では、バルザックはそこにどのような視線を投げかけているのか。彼は、ただ単純にキリスト教が復活すればよいと考えているのではない。バルザックにとってキリスト教とは重層的なものであり、「今」のキリスト教を否定するような発言もしている。1837年５月31日付のハンスカ夫人への手紙ではこう明言されている。「私はローマ教会を信じてはいません。（…）スウエーデンボルグ主義が私の宗教なのです。スウエーデンボルグ主義は、古い思想のキリスト教的な意味における反復にほかなりません[(4)]。」また「『神秘の書』序文」では、「神秘主義とはまさしく純粋な原理におけるキリスト教である」（XI，504）という。しかし、このようなキリスト教は、『風俗研究』の対象とはならない。

別のハンスカ夫人への手紙には、こうも書かれている。「聖ヨハネの神秘主義的宗教は、論理的であり、優れた人物にとっての宗教です。ローマの宗教は、大衆の宗教です[(5)]。」『風俗研究』が描くのは、この「大衆」であり、したがってそこでの宗教は、社会的な色彩の強いものとなる。宗教とくにカトリックとは、社会の問題を解決するための手段なのである。「『人間喜劇』総序」には、「キリスト教、とりわけカトリシスムは、『田舎医者』で述べたように、人間の堕落した傾向を抑圧するための完全な制度であり、社会秩序の最も偉大な要素なのである」（I，12）と記されている。このような宗教の社会性は、政治や道徳と容易に結びつく。『ランジェ侯爵夫人』には「宗教は常に政治的に必要なものでありつづけるでしょう。（…）カトリック教を、そのすべての結果とともに受け入れましょう。」（V，970）という発言があり、『田舎医者』でベナシスは、「この場所で私は、宗教の政治的必要性と道徳的有効性を認めました」（IX，447）と述べる。

宗教が社会に必要なのは、社会に欠陥があり、政治がうまく機能せず、道徳が乱れているからである。では、キリスト教はどのようにしてそうした状態を改善しうるのか。この点で重要なのは、『田舎医者』のベナシスの次の言葉である。

宗教とは《絆》LIENを意味します。そして信仰、あるいは別の言い方をすれば、はっ

きりと表現された宗教は、社会的な「種」を結びつけ、それに永続的な形態を与えることのできる唯一の力なのです。(IX, 447)

『田舎医者』や『村の司祭』は、バルザックのキリスト教精神が強く表現された作品である。しかし、いずれの小説でも、人々を幸福へと導くのは、キリスト教の教義だけの力ではない。そのためには、宗教によって結びつけられた、さまざまな人物の助けが必要なのである。宗教の教えだけでは限界がある。しかし同時に宗教は、聖職者を媒介として、人と人を結びつける働きをする。バルザックはキリスト教の意義をこう捉える。そしてこのことは、小説の物語が人と人とのつながりから生まれるという意味で、文学的な表現へと発展してゆくだろう。小説の物語における社会性の一つの始点が、聖職者であり宗教なのである。

聖職者と階層

十九世紀のフランス社会において、聖職者は偏在する。しかし彼らが特殊なのは、社会を構成する階層とは別のところに位置するという点である。

『金色の眼の娘』の冒頭部で、バルザックはパリの住人を四つの階層に分類し、それぞれの特徴を説明する。ここで示されている区分は、職業と関連づけられており、最下層にいるのがプロレタリアート、一番上の層が芸術家である。職業とは、階層の指標にほかならない。このようなヒエラルキーは、フランス革命が「平等」をスローガンの一つとして主張したにもかかわらず、その後のフランス社会にも認められる特徴である。プルーストの『失われた時を求めて』で、ある人物は、「社会はいくつかの閉ざされたカーストから成り、全員が生まれたときから両親の占めていた階級に位置づけられ、例外的な経歴や望外の結婚といった偶然がなければ、そこから抜け出して上層のカーストに入ることはできないという考え[(6)]」を持っていたという。ただ、小説の、とりわけバルザックの小説の面白さは、登場人物が、あらかじめ定められていたはずの階層を飛びこえたり、そこから下へと転落する過程を語るところにあるともいえるだろう。

しかし聖職者は、こうした階層の差とは無縁のところにいる。『村の司祭』のボネは、「天職という、定義しようのない力による以外の理由で司祭になるということは、私には理解できません」(IX, 729) という。もちろん聖職者の出自は、それぞれ異なっている。『赤と黒』のジュリアン・ソレルのように、貧しい家に生まれて聖職を志す場合も多かっただろう。しかし、スタンダールのこの小説も示しているように、宗教は階層の差を超越している。すべての階層を覆い、すべての地域に根づいた形で、聖職者のネットワークが作られている。ここに、『人間喜劇』の聖職者が多数いる理由がある。またロロー神父のように、セザール・ビロトー、『鞠打つ猫の家』のギヨーム夫人、『ラブイユーズ』のブリドー夫人などの聴罪司祭であるとともに、『オノリーヌ』ではモーリスのおじとして登場し、「国務

大臣と同じくらいの力を持ち」、「五十年近くにわたってあらゆる情念を打ち明けられ、国王や王族たちの大変重い心をその手で計ってきた」（II，579）人物もいる。

教会は、社会とは別箇の社会を形成しているといってもいいだろう。カトリック教会内部にも、ヒエラルキーがある。バルザックはその部分にも目を向けた。『トゥールの司祭』と『村の司祭』は、ビロトーとボネだけの物語ではない。この二つの小説には、同時に何人もの聖職者が登場し、考え方や教会内での立場の違いなどをとおして、二人の司祭の独自性が掘りさげられてゆく。

教会内での階層と対立の問題を扱っているのが、『トゥールの司祭』である。人はいいが愚かなところもある司祭ビロトーは、サン＝ガシアン大司教座参事会員への出世をひそかに熱望している。しかし下宿の女主人ガマールに憎まれ、同じ下宿に住むトルベール神父と対立して、その願いはかなわない。結局ビロトーはトゥールから遠く離れた村の教会へと追いやられ、しかも遺産を詐取したとしてその聖務を禁じられる。トルベールの方は、司教総代理となり、トゥールの司教の座にまで上りつめる。

トルベールの出世とビロトーの零落は、彼ら二人だけに関係することではなく、また教会内にのみとどまる問題でもない。聖職者は、教会が置かれた地域の住民と接し、人々は彼らに敬意を払う。聖職者は町あるいは村の人間関係における主要人物なのである。ビロトーには、サロモン・ド・ヴィルノワ嬢という、「トゥールの最も貴族的な社会に属している」（IV，196）知り合いがいた。そしてガマール嬢がビロトーを下宿に迎えいれることによって望んでいたのは、サロモン嬢などを含めて、「自分の客間を、かなりの数の人々が喜んで毎晩やってくるような場所にすること」（IV, 196）（傍点は原文イタリック）であった。しかしビロトーは彼女のそのような願いに気がつかない。「助任司祭は、週に二度はド・リストメール夫人の家、三度はサロモン嬢の家、残りの二日はメルラン・ド・ラ・ブロティエール嬢の家を訪れて夜をすごすようになり、かつての習慣を取りもどした」（IV，198）。こうした振るまいは、『従兄ポンス』のポンスが、あちこちの家へ食事にしに行くのを楽しむのを思い起こさせる。

ガマール嬢は落胆し、トルベールを引きこんでビロトーを迫害する。そしてガマールとビロトーの対立は、トルベールとド・リストメール夫人の対立になる。前者は教会の権力を誇示し、後者は貴族の威厳を前面に押しだす。ところが、夫人の甥リストメール男爵は、夫人がビロトーの肩をもったために、海軍少佐への昇進を認められない。「力があろうとなかろうと、大司教も、将軍も、知事も、すべてがトルベールの隠然たる支配力のもとにあった」（IV，232）のである。

徐々に勢力を拡大してゆくトルベールの姿は、身のまわりで起きている状況が飲み込めず、右往左往するばかりのビロトーとは正に対照的である。ここにバルザックの冷徹さを認めるべきなのかもしれない。フランソワ・ビロトーは、その人間関係や人物再登場の効果によって、『人間喜劇』を読む者にとっては好意的に見るほかはない人物である。まず彼は、あの誠実なセザール・ビロトーの兄である。『谷間の百合』では、モルソフ夫人の

臨終に立ちあう。友人のサロモン・ド・ヴィルノワ嬢は、かつてルイ・ランベールの婚約者であった。それを知っている読者は、ビロトーに肩入れしながらその悩み苦しむ様子に接する。ただ、ここではまた、王政復古以降の貴族の力の衰退と、教会がもつ権力の伸張の表現も、同時に読みとるべきだろう。情け容赦なく権力を振るうトルベールは、『娼婦の栄光と悲惨』で、「リュシアン・ド・リュバンプレは今日の最も大きな権力である教会によって庇護されている」（VI, 434）と、ラスティニャックに向かっていうヴォートラン＝エレーラとつながっている。

しかしながら、このような教会の権力は、教会が組織としてもつ力であって、宗教性に由来するものではない。『トゥールの司祭』は、中心人物を含めて聖職者を何人も登場させながら、宗教的な小説ではないという逆説を含んでいる。信仰としての宗教はそこから排除され、キリスト教的な道徳が説かれることも、敬虔な感情が表現されることもない。ビロトーとトルベールに共通するのは、聖職者の名のもとに隠された利己主義である。ただビロトーの利己主義は、自分の日常的な生活と関わりのある範囲にのみ限られたたわいないものだったが、トルベールの野心と冷酷さは、教会という社会を越えて、ほかのバルザック的人物と共通する《情熱》の表現となっているだろう。

聖職者と信者

『田舎医者』でベナシスは、司祭と法律家と医者という職業について、こんな発言をしている。

> 司祭と法律家と医者を、「三黒衣」という言い方でまとめているのは、理由のないことではありません。司祭は魂の傷の手当をし、法律家は財布の傷、医者は肉体の傷の手当をします。彼らは良心、所有地、健康という、三つの主な存在項目において、社会を象徴しているのです。（IX, 432-433）

いずれの職種も社会の中で重要であり、また人間とじかにかかわりあう仕事をする。ただ、法律家と医者は、高度に専門的な知識を必要とし、仕事の目的や対象は明確であるのに対し、聖職者が向きあうのは、「魂」や「良心」といった、とらえどころのないものである。ここにも、聖職という職業の特殊性があるだろう。『人間喜劇』において聖職者は、けっして「神の人」ではなく、人間らしい感情を伴っている。そうした人物が、これまたさまざまな感情をもつ信者を相手にするのである。

では『人間喜劇』において、聖職者は具体的に信者とどのようにかかわっているのだろうか。キリスト教は、日常生活の中に溶けこんでいる。人々はミサに行き、復活祭やクリスマスなどの祭日を祝う。とりわけ誕生、結婚、死といった人生上の節目には、聖職者が重要な役割を果たす[(7)]。

信者を教育し、その生活を導くのも、聖職者の仕事であった。『村の司祭』のヴェロニックは、修道女から読み書きを学ぶ。彼女の精神的な支えとなるのは、神父デュテイユであり、ボネである。『ウジェニー・グランデ』のウジェニーや『ユルシュール・ミルエ』のユルシュールも、近くにいる聖職者に助言を求め、素直にそれに従う。

ただ、聖職者は常に道徳的に正しいことだけを信者に伝えるのではない。『金色の眼の娘』で、少年時代のアンリ・ド・マルセーを教育する神父は、普通の聖職者とは大きく異なっている。「マロニ神父という名のこの偉大な人物は、文明をそのあらゆる側面から研究させることによって、自分の生徒への教育を完成させた。彼は自分の経験によってマルセーを育て、当時は閉鎖されていた教会へはほとんど連れて行かなかったが、時々劇場の舞台裏に入らせたり、それ以上に頻繁に高級娼婦の所へ行ったりした。人間の感情を一つ一つ分解して見せ、当時政治について激論が交わされていたサロンで政治を教えた」（V，1056）。ダドレー卿の私生児であり、親子関係が稀薄だったマルセーが、この小説で描かれるような女性を誘惑するダンディとなり、さらには政治家として力をつけ首相にまでなるためには、このような神父の教育が必要だったのである。

マルセーとマロニの関係は、リュシアン・リュバンプレと「神父」カルロス・エレーラの関係を思わせるところがある。『幻滅』第三部で、ヴォートランはリュシアンに向かっていう。「私は何かに身を捧げることが好きなのだ。これが私の持っている悪徳だ。私は献身によって生きている。だから私は神父になったのだ」（V，708）。リュシアンが自殺を思いとどまり、ヴォートランの誘いに乗ることは、ヴォートランの献身の対象がリュシアンに変わることを意味している。神が人間を作りだしたように、彼はリュシアンを新しい人間に作りかえる。「この美青年は私だ。このリュバンプレ侯爵はわしが作ってやり、貴族社会に送ってやったのだ」（V，708）と、エレーラはすでに『娼婦の栄光と悲惨』の物語を予告している。聖職者という「父親」pèreは、教育者でもあることによって、信者とのあいだにいっそう強固な上下関係を形成する。ある者にとっては父親が二重に存在することになり、またある者にとっては、聖職者が父親の代わりとなる。

聖職者と信者の関係において見すごすことができないのが、告解あるいは告白という行為である。もちろんこれは、信者にとって切実な意味をもっているが、小説の語りにおいても、いろいろな機能を果たしている。

『村の司祭』は、告白の積み重ねによって物語が進行しているといえるほど、多くの身の上話が挿入されている。ボネ自身の話、ジェラールの手紙による訴え、ファラベッシュとカトリーヌの告白など、本人の言葉をとおして人物の考えや感情が読者に伝えられる。ヴェロニックもまた、早い段階で、みずからの罪と犯罪への関与をボネに告白しているはずである。「司祭様、今日から私は司祭様の告解者となります。明日、総告解をしにうかがいます」（IX，791）。しかし、処刑前のタシュロンがボネにしたであろう告白と同様に、読者には彼女の告白の内容は知らされない。真実は、時々ほのめかされつつ、死の間際の公開懺悔まで宙吊りにされている。

信者が聖職者に告解するとき、何らかの罪を犯したか、あるいは罪の意識を抱いていることが前提としてある。そして告解では、嘘をついたり隠し立てをすることはできない。ただ、告白された内容は、外部に漏らすことは許されず、聖職者と信者のあいだでの秘密としてとどまる。つまり告白は、真実の暴露と同時にその隠蔽という二重の機能を含みもっている。

リュシアン・リュバンプレも、『幻滅』第三部で、カルロス・エレーラと出会って告白をする。「このスペイン人神父は実に情愛のある人に思われたので、詩人はためらうことなく自分の心を彼に打ち明けた。そしてリュシアンは、アングレームからリュフェックまでの間で、一つの罪も省くことなく自分の人生のすべてを語り、最後に、少し前に引き起こした災厄について打ち明けた」(V, 694)。ここで行われているのは、キリスト教的な意味での告解ではないが、エレーラの神父の装いがもたらした告白であろう。しかし、この告白は、叙述上どうしても外せなかったはずである。ここでは読者は、リュシアンの過去をすでに知っており、わざわざ告白の中身を伝える必要はない。しかしエレーラ＝ヴォートランは、この告白によってリュシアンという人物を知り、そこから『娼婦の栄光と悲惨』へと物語が接続されるのである。

『三十女』では、ジュリー・デグルモンのやつれきった様子を見て、ある神父（名前は示されない）が何とか力になろうと彼女のもとを訪れる。ヴェロニックと異なり、ジュリーは篤い信仰心をもつ人間ではない。したがって、聖職者に向けてここで行われている告白は、悔悟の表現や救いのためではない。この場面が作品の中で重要なのは、ジュリーが心に秘めていた感情を、自分の口で吐露するという役割である。読者はそれによって、初めて彼女の苦悩を受けとめることになる。

この告白でもう一つ意味深いのは、司祭がジュリーの話を聴きながら、その悩みに対してなすすべもないという事実である。強調されているのは、彼女の苦悩の深さであり、またそれに対するキリスト教の無力さである。ジュリーはヴェロニックと同様、夫を愛することができない。しかしヴェロニックはボネによって救われるが、ジュリーは苦しみを募らせるばかりである。キリスト教が登場人物に何をもたらすか、そして登場人物がキリスト教をどう受けとめるか。こうした細かな部分での差異が重なりあうこともまた、人物像の造型に寄与しているだろう。

道徳と肉体

宗教の教えは道徳と直結している。聖職者は信者に、宗教的かつ道徳的な生活態度を要求する。日々守るべき規律の中で、根本なものの一つが、性行為にかかわる問題である。キリスト教は性的な快楽の抑圧を前提として含みもっている。そもそも聖職者は、恋愛から生まれる感情や肉体的な欲望をみずから禁じた人物にほかならない。

それとは対極的な、俗に「生臭坊主」と呼ばれるような存在も、聖職者の一つの類型で

ある。『フランドルのイエス・キリスト』には、こんな司教が登場する。「彼は、妾にしている女のことを考えていた。その女は、心をこめた宴の準備をして彼を待っており、今頃はおそらく風呂に入り、香水を身にふりかけ、ビロードの服を着て、ネックレスや宝石の留め金を留めさせていただろう」（X，318）。ただこの小説は、十九世紀のフランスから時間的にも空間的にも遠く離れた物語であり、こうした聖職者は例外である。

『人間喜劇』の聖職者の多くは、肉体の快楽を否定するか、性的な問題に無知である。『老嬢』のド・スポンド神父は、姪にあたるコルモン嬢の後見人だが、「ぼんやりしていて、肉体の動揺については何も理解せず、自分の大事な娘が独身のままでいることを神に感謝していた」（IV，861）。ウジェニー・グランデは司祭に、「結婚しても処女のままでいることは罪になるのでしょうか」とたずねると、司祭は「それははっきりと是非を決めかねる問題です」（III，1192）と答える。

この点についても興味深いのは、カルロス・エレーラである。娼婦の過去をもちながらリュシアンを愛するエステルは、エレーラに向かって、「あなた方のような聖職者は、愛というものが何かをご存知ありません」（VI，453）という。しかしエステルは、エレーラの表面しか見ていない。エレーラの聖職者性が強調されると同時に、ここでは何とも倒錯的な叙述がなされている。「もちろん司祭は、曲げられた上半身の重みでほとんど押しつぶされていた乳房の可愛らしい丸みにも、黒いスカートの下に見える、うずくまったヴィーナスの何とも魅力的な体の線にも、無関心だった」（VI，450）。エレーラがエステルの色香に動じないのは、彼が聖職者だからではなく、同性愛者であるからにほかならない。さらにそこには、リュシアンの心をとらえてしまったエステルの魅力に対するエレーラの嫉妬心が重なりあっている。

『二重の家庭』は、結婚後も妻がキリスト教的な道徳を忠実に守ろうとしたことによる不幸を描く。グランヴィルは、結婚契約を結ぶ日に、妻となる女性の母親ボンタン夫人から、「娘の宗教上の実践を尊重すること、その信仰に完全な自由を与えること、望むだけ聖体拝領をさせ、教会に通わせ、告解をさせること、宗教的な指導者を選ぶ上で娘に反対しないこと」（II，57）を誓わされる。物語は、家の内部の様子、夫人の服装、食事などをとおして、「信心に凝り固まった女性」bigoteの生態を描きだす。夫婦の性的関係についても仄めかされている。妻が母親や神父から命じられたことを実行すれば、夫は外へ逃げだし、別の女性を見つけて「二重の家庭」を作るほかはない。

グランヴィル夫人は、ノルマンディー地方バイユーの出身であり、彼女の宗教的感情は、十九世紀前半のパリと地方の差異を際だたせている。グランヴィルは結婚前にすでに不安を覚えているが、父親は、結婚してパリに行けば、「祝宴と結婚式と芝居とパリ生活の魅力で、あの娘も、告解や断食や苦行衣やミサのことなどすぐに忘れてしまうだろう」（II，52）という。しかし、夫人の聴罪司祭フォンタノンがそれを許さない。「この三十八歳くらいの前司教座聖堂参事会員は、実に寛容で開けたパリの聖職者たちの中に、地方のカトリック教会の冷酷さと、様々な要求によって小心な人々を締めつけるあの堅固で偏狭な信

仰を持ち込んでいた。彼に叱責されて慄然としたグランヴィル夫人は、その罪を償い、以前のジャンセニズムに戻ってしまった」(II, 62)。教会を絶対視する厳格なフォンタノンは、聖職者像として、『トゥールの司祭』のトルベールと共通している。

ジュリー・デグルモンと対比的なのが、『オノリーヌ』の主人公である。彼女は、夫との結婚に満足できず、家を出る。このような振るまいは、彼女にとって、神の否定であり、社会への反発である。彼女はロロー神父の勧めも拒み、ほぼ同じ意味のことを二度述べる。「法的にも、宗教的にも、社会的にも、私はオクターヴのもとへ戻らなければなりません」(II, 580)。「かくして、神、法律、社会、すべてが一致したのです」(II, 582)。宗教、法律、社会はオノリーヌにとって、別々のものではなく、一体化してみずからの幸福を奪うものとしてとらえられている。

グランヴィル夫人は、まったく受動的な形で宗教に支配され、家から出ようとしない。オノリーヌは、自由を求めて束縛から身を引きはがす。ヴェロニックやジュリーの行動は、この両極端の中間に位置づけられる。

日常生活において宗教がもたらす力は、その道徳的側面ゆえに、男性よりも女性の方により強く働く。女性は聖職者と密接にかかわり、女性を中心人物とする小説では聖職者が不可欠の存在となっている。ヴェロニックとボネ、ジュリーと名のない神父、グランヴィル夫人とフォンタノン、オノリーヌとロローの関係は、一方は人妻、もう一方は聖職者であり、したがって属性の部分では共通している。しかし、精神的な意味での両者の結びつきは一様ではなく、そのことが、女性の個性を際だたせ、人物や物語の多様性を生みだしている。

この多様性は、女性が家族や社会とどう向きあうかという部分ともかかわっている。夫婦の問題のあいだに聖職者が介在することによって、女性の心理は、社会的な重要性をもつ別の視線と交差し、衝突する。そのことが、人物の感情に現実味を与えるとともに、ロマネスクな表現を深めるという構造を、バルザックのいくつかの小説は備えているといえるだろう。

信仰の諸相

グランヴィル夫人のごとき「信心に凝り固まった女性」の姿を描くのは、キリスト教の負の側面を強調することとつながっている。彼女のような信仰のあり方とは正反対だが、無神論もまた、宗教の否定にほかならない。『人間喜劇』には、無神論者やキリスト教を信じない人物も少なくない。

みずから無神論だと公言するのは、優れた知性の持ち主と形容しうる人物に多い。『無神論者のミサ』に登場する外科医デプランは、死者を解剖しても、「宗教的な理論にどうしても必要なあの唯一の魂」(III, 387) を見出せず、無神論者となる。リュシアン・リュバンプレは、「神父」カルロス・エレーラと出会った際に、自分が無神論者だと告げる。

ルイ・ランベールは、「生まれつき宗教的な性格を持ちながら、ローマ・カトリック教会のこまごまとした宗教的行為を認めていなかった」（XI，639）。『サラジーヌ』の主人公となる彫刻家は、イエズス会の学校に入るが、告解の順番を待つあいだ、薪に冒涜的なキリスト像を彫ったために、放校処分を受ける。こうした人物たちにとって、宗教とは二の次であり、それとは別に信じるもの、追求すべきものがある。ジェンダーとしては、基本的に男性であることも特徴といえよう。

盲信と無神論を両極端として、そのあいだに信仰のさまざまなヴァリエーションがある。信仰のあり方としてバルザックが理想とみなしていたのが、「炭焼の信仰心」foi de charbonnierと呼ばれるものである。これについては、『無神論者のミサ』、『フランドルのイエス・キリスト』、『神と和解したメルモス』などで言及されている[(8)]。「炭焼の信仰心」は、『田舎医者』に登場する司祭ジャンヴィエの、「宗教とは感じとられるものであって、定義されるものではありません」（IX，504）という言葉とつながっているだろう。信仰は理性の結果として得られるものではなく感情と結びついており、そのとき、理性の力を越えて人を幸福にする。無神論者のデプランは、苦しかった時代の自分を助けてくれた、ブルジャという、「炭焼の信仰心」をもち「妻がいれば妻を愛したのと同じように聖母マリアを愛していた」（III，400）男の魂の安寧のために、ミサを寄進し、その日に必ず参列する。『無神論者のミサ』は、宗教の否定ではなく肯定の物語として受けとめるべきだろう。

信仰のあり方について、もう一つ重要なのが、改宗という問題である。改宗は、登場人物の人生の中で決定的な転機にほかならない。フェリシアン・マルソーは、「『人間喜劇』における改宗の驚くべき数の多さ」[(9)] を指摘している。もちろん見られるのは、無神論あるいは宗教的無関心やプロテスタントからカトリックへの改宗である。

『村の司祭』に登場する医師ルーボーは、「デプランおよびカバニスの後継者たちの教え子」で、師と同じく「カトリック教を信じていなかった」（IX，811）が、ボネの予想したように（cf.，IX，812）、ヴェロニックの臨終の秘跡を目のあたりにし、「呆然として一瞬のうちにカトリック教徒と」（IX，870）なる。ここで重要なのは、彼の改宗が、聖職者の導きによるのではなく、ヴェロニックという信者を媒介としてなされたということである。同様のことは、『ユルシュール・ミルエ』のミノレの改宗にも見られる。彼は、百科全書の人々、理神論や感覚論や唯物論の信奉者を患者にもつ医者であり、無神論者だったが、オカルト的とも形容しうるような超自然的現象を体験し、神を信じるようになる。

無神論者の傍らに、親しく交際する聖職者や熱心な信者がいるというのは、『人間喜劇』の特徴と呼びうるのかもしれない。『無神論者のミサ』のデプランとブルジャ、『村の司祭』のルーボーとボネやヴェロニックと類似した関係にあるのが、『ユルシュール・ミルエ』のミノレとユルシュールおよびヌムールの司祭シャプロンである。ミノレとシャプロンの「二人は、幅広い教養があり、したがってこの神の人は、ヌムールの中で唯一人、無神論者を理解することができた」（III，791）。デプランとルーボーとミノレが医者であるのは、

偶然ではなく、意識的な反復ととらえるべきだろう。

この引用の少し前のところで、バルザックは、「両極端は相通じる」les extrêmes se touchent（III, 791）という諺によって、二人の関係を説明している。すでに述べたように、バルザックはカトリックの意義をはっきりと認めていたが、それを絶対視していたわけではない。『人間喜劇』において、無神論者と聖職者が共存し、信仰のあり方が多様なものとなりえたのは、そうした作者の宗教観ゆえであろう。そして信仰とは、一方で個人の心の中の問題だが、他方では、社会と結びついている。聖職者は、このミクロとマクロの双方に関与する存在にほかならない。十九世紀前半のフランス社会とそこに生きる人々を描く上で、聖職者という存在は無視することはできない。しかし、作者バルザックとは別の形で、この社会はもはや宗教を絶対的なものとみなしていない。その相対性によって人々の信仰の度合いは多様になり、またそれらの人々が共存し混じりあうことによって、物語も差異化されてゆく。

今日ではキリスト教は、バルザックの時代のような相対的な価値すら無くしているのかもしれない。しかし、人間がもっている「信じる」という感情を考える上でも、『人間喜劇』の聖職者と、彼らを取りまく人々の表現は、依然として意味を失っていないだろう。

注

（1） *Lettres à Madame Hanska*, R. Laffont, 1990, t.1, p.1204.

（2） *La Comédie humaine,* dir. P.-G. Castex, Bibiliothèque de la Pléiade, 1976-1981, 12 vol.に収められている作品については、引用文の後に巻数と頁数を記す。

（3） Mona Ozouf, *Les aveux du roman*, Fayard, 2001、江島泰子、『「神の人」19世紀フランス文学における司祭像』、国書刊行会、2015年などを参照。

（4） *Lettres à Madame Hanska*, op.cit., t.1, p.386.

（5） *Lettres à Madame Hanska*, op.cit., t.1, p.325-326.

（6） 『失われた時を求めて　スワン家のほうへⅠ』、吉川一義訳、岩波文庫、2010年、50頁。

（7） これらの点については、Michel Lichtlé, « Vie religieuse et vie privée dans le roman balzacien », *L'Année balzacienne*, 2013, PUFが詳しく検討している。

（8） foi de charbonnierについては、Philippe Bertault, *Balzac et la religion,* Slatkine, 1968, p.209-212を参照。

（9） Félicien Marceau, *Balzac et son monde*, Gallimard, 1970, p.598.